

# 表紙モノ語り

## マルケサス諸島のタパ

樹皮布(タパ) (標本番号H0162578) 縦51×横125cm、  
製作年代1980年



須藤健一

南太平洋のマルケサス諸島の銀行やホテルには、額に入った復興タパ(樹皮布)が誇らしげに飾られている。織物の技術をもたないポリネシアの人びとは、カジノキの内皮を打ちのばしてタパを衣服に、寝具に、そして交換財に使用してきた。

タパは、カジノキを指すタヒチ語の「タパ」がヨーロッパに紹介されて樹皮布を意味するようになった。現在、タパは、マルケサス人のアイデンティティとエスニシティを表象するうえで不可欠である。

マルケサスは、刺青の島として西欧に知られていたが、キリスト教の布教とともにその慣習は廃棄

された。刺青とタパの図案には共通性がある。その図柄には、三角形や曲線、神話上の神々、創造神チキ、ニワトリ、ウミガメ、エイ、トカゲなどの生き物、人間の瞳や性器、雲などが抽象的に描かれる。

表紙のタパの最上段の図は「雄鳥の歩き方をする男」といわれる。ポリネシアの刺青研究の第一人者の桑原牧子(金城学院大学)さんによると、中央縦の図はウミガメ、左よりの二重円で囲まれた図柄は巻貝、その右下には人面がそれぞれ描かれているという。

タパの製作技術は、ハワイやタヒチなどからは消えてしまったが、マルケサスには一九二〇年代まで

残っていた。六〇年代になって島に寄港するヨット旅行者のみやげ物としてタパが再興された。その後ポリネシアン・ルネッサンスの動きにそって刺青とタパに代表される固有の文化が復興した。

一方、トンガ王国では古来から女性たちがタパをつくってきた。今でも幅三メートル、全長二〇メートル余の「完全タパ」は、結婚式の衣装、葬式の贈りもの、踊りの盛装、民族芸術品として国内外での価値は高い。

この収蔵品のように、刺青のデザインを模したものは一八七〇年ごろまではさかんに使用されていたとの記録がある。

